

---

**IS インフィニットストラトス ~静かなる奏~**

貴大炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス 〈静かなる奏〉

### 【Nコード】

N8200R

### 【作者名】

貴大炎

### 【あらすじ】

主人公：奏勇歌は音楽家の夢を持つ中学三年生であったが、偶然触れた

『IS』を動かしてしまい親友（笑）の陰謀でIS学園に入れられることに

なってしまった・・・。

奏勇歌と織斑一夏を基本視点としたラブコメディ（予定）！！

注：二次創作です

## プロローグ(前書き)

言わなくても分かると思いますが二次創作です・・・。

## プロローグ

『IS』

正式名称は『インフィニット・ストラトス』。

最初は宇宙空間での活動を想定して開発されたマルチフォーム・ス  
ーツ。

しかし宇宙進出が上手くいかず高スペックゆえに兵器へと変わり・  
。

最終的には世界各国の思惑によりスポーツに落ち着いた・・・と・  
。

だが一番注目すべきはやはり・・・ここだな・・・。

？原則として、女性にしか扱えない？

・・・じゃあ俺とニュースに出てた？おりむらいちか織斑一夏？くんはどうなるの  
よ。

「奏、お前IS学園に入学しないか？」

「・・・呼び出した第一声がそれなのかよ」

はじめまして、俺は奏かなでいさか勇歌。

中学3年生・・・進路決定を迫られているいわゆる『受験生』であ  
る。

夢も希望も満ち溢れるそんな俺ですが・・・人生で一度しくじった  
んです。

『IS』を開発する企業の息子と親友？になっちゃったのが運のつき。

その親友の誘いで親父さんの工場見学、ここまではいい。

そこで本当にたまたま『IS』に触れたときに・・・起動させてしまったらし

く、その場で捕縛された。

そして、大体同時刻にIS学園の第一受験の会場にて件の？織斑一夏？も

『IS』を起動させたらしく騒然となった。

まあ、俺にとってはどうでも良く隙を見てぱとトンスラしたのだが・・・。

翌日 いまここです^^；

「他に何かあるってさ」

「まあな・・・」

「で、どうだ？」

まあ、普通の人はまるで？運命？のように感じて乗っかるかもしれん・・・が。

「俺には音楽家になる夢があるんだ、ゆえに断る」

「・・・ああ、そうだったっけか」

「そつだよ、確かに『IS』ってのもなんか良いものに感じるけど俺には夢があるんだよ！」

俺には小さいころから夢があり、音楽家になると言うロマンあふれるものが心に根付いているのだ。

・・・たしかにあの時身体に馴染んだし、鎧を纏って戦うってのもロマンがありそうだが

昔からあるものを急に捨てたいとも思いたくもない。  
だがここで俺にひとつある問題が浮上した。

「じゃあ奏さんは学費一人で払っていくつもりなのか・・・それは・・・お気の毒に・・・」

「・・・」

そう、俺は一人暮らしなうえ貧乏。あげく両親は他界している。俺の行こうとしている学校は音楽に関連した高校でも一流といっても良い場所で学費もはんぱではない・・・。奨学金は下りない、金ない・・・でも行きたいと板ばさみな苦悩を味わっていた矢先だったのだ・・・。

「・・・まあ奏、良く聞けよ・・・別に音楽つてのは場所問わずに磨けるだろ？」

「う・・・まあな・・・」

「それに普通だれもがもち得ない力をお前は持つてるんだぞ？それをこころすのか？」

「・・・」

「もしIS学園に入るってーならお前の夢を親父と俺がバックアップしてやっからさ、もちろん卒業後も！」

「・・・」

「な？」

どうやら選択肢はないらしい・・・完全に論破されてしまった。

「・・・」

「わかった！入ります！」

「よくいった!!！」

俺はいま？運命？に全速力で飛び乗った・・・。

## プロローグ（後書き）

初めてSSを書きました^^;

至らぬ点もござりませうが少しでも

希望がもてたら読んでくださいm（）  
（）m

## 第一曲 入学と再会の章 前編（前書き）

こちらは前編である。異論は認めん！

二次創作であります！原作とはかけ離れる可能性大！

## 第一曲 入学と再会の章 前編

IS学園、それはアラスカ条約に基づいて日本に設置された

IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。

ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。

また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、干渉されない。

そのため、他国のISとの比較や、新技術の試験にも適しており、  
そういう面では重宝されているとのこと……。

ふうむ……。

やっぱりというかこうなるんだな、おい。

教室のなかは見渡す限りに女子、女子、女子。

……樂園（ヘン）といえは良いのか地獄（ヘル）といえはいいのか  
どうなのだろう……とりあえず視線が痛い……。

おっ……俺の席はどうやら織斑一夏の後ろのようだ、ある意味助  
かった。

しかし彼も見ただ感じ普通な感じで安心した、彼も周りの視線やられ  
ている。

「全員そろってますねー。それじゃあショートホームルームはじめ  
ますよー」

……返事がない、皆夢中のようだ。

「え、ええと、私はこのクラスの副担任になりました。山田 真耶

です、皆さん  
一年間よろしくお願いします」

再び全員反応なしになりそうに思ったので俺一人「よろしくお  
願いします^^」

とっておいた。あ、先生少しほっとしたようだ。話を続けた。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと……出席番  
号順で、織斑 一夏くん」

……あれ？織斑一夏はだんまりを決めたのか？何も反応がない。  
……寝たか？

「織斑くん？あのー、織斑 一夏くん？……織斑 一夏くんっ  
！」

「は、はいっ!？」

あらら、周りの女子にクスクス笑われてら……何をやってたんだ  
かなあ

「え、えっとそれじゃあ織斑くん、自己紹介を……」  
「あ、はい!」

ようやく立ち上がったな、さあどうなるかな？

「えー……えっと、織斑 一夏です。よろしくお願いします。」  
……ん？まさか終わりか？周りのやつら期待してるんだからそ  
はもっとこらう……。

「以上です」

ガダダーン！と女子がずっこけるさまはシユールの極みだった。しかし趣味とか今後の抱負とか色々言うことあると思うがなあ。ほらあまりのことに先生泣きそうだぞ？

スパアンツ！

おお、良い音だ。ん、この人はだれだ？

「げえっ！？千冬ね」

スパアンツ！

すばやく第二打が入った、しかし見事だ。

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者が……。」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

どうやら担任だったようだ、だが十中八九目の前で頭抑える男の姉だな。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、

私の言うことは聞け。いいな」

やばい、この日と絶対？強い？いろんな意味で……。



第三打ア！うん、痛そうだな。

「何度もいわせるな、織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「え？ 織斑くんって、あの千冬様の弟？」

「それじゃあ、男子で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

女子が騒ぐが織斑先生はスルー、流石だ。

「山田君、続きを」

「あ、はい……では次は奏 勇歌くん」

お、どうやら俺のようだな。

力行ゆえいたしかたあるまい。

「っと、はい」

……まあ、今度はこっちに視線が来ることはわかった。

「はじめまして、奏 勇歌です。」

趣味は主に楽器の演奏などで、好きなものは蜂蜜

ISについての経験も知識も未熟ですが3年間よろしくです！」

「……おおー！！！！」

惜しみなく送られる拍手……少し照れるな。

そして俺の後も次々と自己紹介がなされていったがこれからどうするかを

考えていて周りの言葉はあまり頭にはいらなかった……。

SHRが終わったら案の定織斑一夏が話しかけてきた。

「よろしく、俺は織斑一夏だ。一夏でいいぜ。」

「こちらこそよろしく、奏勇歌だ。勇歌と呼んでくれ。」

握手を交わすおれら、唯一の男子同士なんだから仲良くせずどうする。

「一夏」

「ん？おお、箒か」

「おや？どちらさん？」

「ああ、俺の幼馴染の箒。小学校のころ良く一緒に遊んだりしたんだ」

「ほう」

篠ノ乃 箒は一夏の幼馴染らしい。

へえ・・・きれいな子だな、なかなか隅に置けないなあこの男は。

「そつだ、剣道の全国大会優勝おめでとう」

「！なぜ知っているんだ！？」

「新聞で見たからな。」

「む・・・そうか・・・」。

「6年ぶりだな、でも一目で箒ってわかったぜ。」

「そ、そうか！どうして分かった？」

「ほら、髪型も同じだしさ」

「ほ、ほう良く覚えているものだな・・・。」

ふむ、俺も一目で分かったよ。箒は一夏に気があるって。

「これからもよろしくな。」

「……………ああ、よーキーンコーンコーン」

うわお、なんてタイミングだ…………。

「あ、箒早く座ったほうが良いぞ」

「……………」

箒は残念そうな顔で席に戻っていった。だろうなあ。

「?どうしてあんなに暗くなってるんだ?箒。」

「わかんのか」

「?ああ」

「このたわけが」

「????」

鈍感にもほどがあるぜよ…………。

ん、先生がきたな、授業が始まるようだ…………。

数分後…………。

「ええつと……………全部分かりません。」

…………おい、何の冗談だ?一夏…………全部つて…………。  
授業に入って早々の事故?である。

なんと一夏は授業の内容が全く分からないというのだ…………。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました。」

スパアンツ！

第四打、いつたいいくつの脳細胞が散っていったと……。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。」

「……すみません。」

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな。」

「い、いや、一週間である分厚さはちょっと……。」

「やれと言っている。」

「……はい、やります。」

なんとも可愛そう、しかし悪いが自業自得としか言いようが……。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。

そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。

そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚える。

そして守れ。規則とはそういうものだ。」

……戻っていった、やはり緊張するものだな。

そして、授業は再開……これからどうなることやら。

第一曲 入学と再会の章 前編（後書き）

後編に続くッ！

**第一曲 入学と再会の章 後編（前書き）**

こちらは後編です、歓迎しましょう！盛大に！  
二次創作ですよ。

## 第一曲 入学と再会の章 後編

「……休み時間だ、予習は大事って事がよく分かったよ。  
一夏こいつのおかげで。」

「おい、いきてるか？」

「……う……」

スタボロだなおい。

まあ、仕方ないっちゃ仕方ねえわな。

「……手を貸してはくれんか？」

「いやあ、俺も忙しいんで何ともできんわな」

「そんな事言うなよ……」

いや事実おれ忙しいんだが、音楽の勉強もあるからな。

……つかさつきから女子どもは何をヒソヒソと……。

「ちよつとよろしくて？」

「ん？」

「お？」

おい、またもや美人だ。

長い金髪にブルーの瞳をしたきれいな白人の美少女だな。

……あれ？こいつどこかであったような。

「聞いてます？ お返事は？」

「ああ、聞いているけど……どういう用件だ？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだ

けでも光栄なのですから、  
それ相応の態度というものがあるんではないかしら?」

あ………思い出したわ。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない? このセシリア・オルコットを? イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「……俺のこと覚えてないか? セシリア。」

「……いつたい何を急に……あら、覚えがあるような……。」

「ほら? 小中と一緒にだったろ?」

「……あ、あああ!」

そう、言っていなかったが俺はいわゆる帰国子女ってやつで中2の途中までイギリスにいたのだ。

その時小中と一緒にだったのが、セシリア・オルコットだったのだ。

ほら、一夏で言う筈だよ。

「なぜ貴方がここに! 第一名前が違いますわよ!」

「……日本に国籍移動するときに名前変えたんだよ。」

「あ……なるほど。」

「勇歌、どういうことなんだ?」

「俺の幼馴染だ」

「ああ、なるほどな。納得。」

まさか、こんなことになるとはな……しかし……。

「綺麗になつたな・・・気づけなかつたわ」

「え？ふ、ふん当然ですわ／＼わ、私も気づけなかつたですが。」  
「ふむ、まあな。」

懐かしいな、イギリスは・・・色々あつたからな。

「あのく、俺からも質問良いか？」

「・・・あら、どうぞ。答えて差し上げますわよ。」  
「代表候補生つてなんだ？」

ドンガラガツシャン！・・・ある意味才能だな、これは。

「あ、あ、あ・・・」

「『あ』？」  
「あなたつ、本気でおっしゃってますの！？」

「一夏、代表候補生というのは国家代表のIS操縦者の、  
その候補として選出されるやつらの事、簡単に言つとエリートだな」  
「なるほどな」

「そう！ エリートなのですわ！」

おお、得意になってますな（笑）

得意になると髪かきあげるのもあいかわらずだな。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくする  
ことだけでも奇跡・・・」

幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、それはラッキーだ」  
「・・・馬鹿にしていますの？」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に  
入れましたわね。」

男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを  
感じさせるかと

思っていましたけど、期待はずれですわね」

「あー、その辺にしとけセシリア、一夏はお前と違ってISを昔から  
知ってたわけではないんだしな。俺もだが」

「・・・甘いですわねえ、奏さんは。まあでも？ わたくしは優秀  
ですから、

あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ？

ISのことわからなことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教え  
て差し上げてよよくつてよ。

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートです  
から」

「ISを動かして戦うやつなら、俺も倒したぞ・・・勇歌はどんな  
んだ？」

「いやまあ・・・勝てたけど。」

そう俺も、倒してたな・・・。勝因はあいての自爆も同然だったが。

「は・・・？ わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「・・・それは・・・」

「女子だけでつてことじゃねえのか？」

あ、地雷ふんだっばい。顔真っ赤だわ。

「あ、あ、あ、あなた、わたくしをぶ・・・」

「くっ・・・、話はまた後で。覚えてらっしゃいませ！」

・・・帰ったか、とりあえず地雷ふんだ目の前のやつにチョップだ。

「なんだよー」と言ってるが放置だ。

「まだ立っている奴、とつとと席につけ。授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといかんからな」

ん？クラス対抗戦？代表？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいろ、まあ、俗に言えば学級委員みたいなものだ」

ああ、そういうのか・・・俺はあまり興味がないんだが。忙しそうだし。

「はいっ、それなら私は織斑君を推薦しますっ！」

「あたしもそれが良いと思いまーす」

「あ、なら俺も一夏を（笑）」

「候補者は織斑 一夏・・・他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

まあ、ご愁傷様だな。

どうやら俺は先手打って一夏に入れたため周りの注意がそれたようだ。

上手く逃れた。

「織斑、席に着け、邪魔だ。他にはいないか？ いないのなら織斑で決めるが」

「俺はやるって言ってな」

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

・・・まあ、セシリア（あいつ）なら来ると思ってたわ。

さっきの地雷ふみといい一夏はセシリアのヘイトをかなりとってたからな。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

へえ、言ってくれるじゃないの。見事な侮辱だな。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。

それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであって、

サーカスをする気は毛頭ございませんわ！ いいですか！？

クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

・・・まあ実力トップは頷いても良いが、ちと言い過ぎだなセシリア。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

第一、古いことだけが、自慢の国の癖に何をほざいてんだか」

あ、一夏キレたなごりゃ。

「あ、貴方、わたくしの祖国を侮辱するのですか!！」

「悪いがセシリア、侮辱はお前も十分してると思っぜ」

「う・・・奏さんまで・・・決闘ですわ!！」

「ああ、いいぜ、やってやるよ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの

小間使い　いいえ、奴隷にしますわよ・・・（チラッ　もちろん

奏さんも含めて。」

ふーん・・・はい？

「ああ、いいぜ。小間使いでも奴隷でも何にでもなってやるよ!！」

「ちよおま!！」

「さて、話はまとまったようだな。それでは勝負は次の月曜日。

放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。

それでは授業を始める」

・・・え、どういうこと？俺が一夏に味方したからその報復ですかこれは。  
ねえ？

## 第一曲 入学と再会の章 後編（後書き）

はい、第一曲終了です。

やはり初めてが多すぎてなかなかかなれない^^;

頑張りますので応援よろしくです。(。口)(/口。)(/口。)/  
ではまた。

## 第二曲 相部屋と特訓の章 (前書き)

第二曲開幕でござーい！

あくまで二次創作ですよ。

ここから特にオリジナルな部分が多くなります

## 第二曲 相部屋と特訓の章

相部屋とは二人の人物が同じ部屋に住み、生活を共にすることである。

それは、同性なら何の問題もないとおもつが……。異性同士というのはすごく……。緊張とか過ちとかが同居する空間へと

変貌するのである……。いまの俺はその極端な例である。

「あ、よかったです。織斑君、奏君。

あなた方二人に伝えることが。」

「はい、なんでしょう？」

はもった（笑）

先生びっくりしてら。

「え、えーとですね、二人の寮の部屋が決まりました。」

ああ、生徒の保護が主な理由で全寮制だっけこの学校。あれ？でも確か……。

「俺の部屋、決まっていんじゃないかなかったですか？前に聞いた時に、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「俺も、そう聞いてましたけど」

「それなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。・・・二人とも、そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

ああ、わかった。貴重な男性IS操縦者を失いたくないゆえの政府の計らいか・・・。

「そう言うわけで政府特権もあって、とにかく寮に入れるのを最優先してみたいです。一ヶ月もすれば二人の方も用意できますから、しばらくは我慢してくださいね」

「そうですか、部屋の件はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「俺も一回戻らんと・・・。」

「あ、いえ、荷物なら・・・。」

「私が手配しておいたやつた。ありがたく思え」

！？ 織斑先生！いつのまに背後に！・・・えっと、とりあえず。

「「あ、ありがとうございます」」

「まあ、織斑は生活必需品だけだがな。奏、お前は夢のための努力が必要と聞いたからな。」

それらに必要なものは手配してまとめさせた。」

おお、隙がねえな織斑先生！・・・ん？良く考えたら親友あいつの差し金なんじゃ。

織斑先生には夢のこと話してはいねえし・・・。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違

いますけど……えつと、その、織斑君と奏君は今のところ使えません」

「ええ？なんで？」

凄く残念そうだな、このスケベが（笑）

……いや素で分かってねえのか、一夏の場合。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「おつ、織斑君っ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ダ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような……」

おいおい、山田先生変な解釈したぞ。

いや周りの女子もだな、またヒソヒソしてるし。

ほんと飽きねえわ、ここは……。

さて……俺の部屋はつと。

鍵も案内用の地図ももらったので場所は余裕で分かった。

しかし、一夏と同じ部屋なんだと思ったら別室とは予想外だ。ん？って事はお互い女子と同室か？

相部屋は……良いんだな……。

とか考えてたら、着いてしまった……部屋に。

さて、どんな奴が相部屋なのか……嫌な予感がする。

だがここまで来たんだ、入ろう。

ガチャリッ

「お邪魔しまー……」

「……………」

説明しよう！今の状況を！！

開けた先にはなんと着替え中のセシリア・オルコット！

白く綺麗な肌、たわわに実ったげふんげふん！！……。

……はい、やっちまいました。

「き、」

「きゃあああああああああああああああああ！」

「すまない！！！」

急いで外にでた……が……ダメ！

部分展開した腕につかまれてしまった。

「なるほど」

「……………」

「奏さんは、この状況を想定せずにノックもせぬまま無作法に入ってきたわけですね……。」

「申し訳ない！」

まじでやっちまった、こんなことは人生初だ。

油断は禁物ってこつたな……。

「……奏さんはわざとやったわけではないのですから、まあ今回は不問にしてあげますわ。」

「本当k「ただし」

「・・・ただし？」

「織斑一夏・・・彼が負けた場合、問答無用で奏さんは私の願いを何でもききなさい・・・いいですわね」

「・・・え「いいですわね！」・・・はい」

「ふむ、よろしいですわ。ではどうぞお好きにくつろぎなさって結構ですわ」

「わーい、やったー！」

思ったより・・・軽くもないがコレですんで良かったのかもしれない。うむ、なに簡単な話だ。一夏が勝てば良い、それでいいんだ・・・。・・・やべえ、不安になってきた。ふむ、こういう時はやはり・・・。

ゴソゴソ

「あら、それは・・・。」

「ああ、そういや昔聞かせてたっけな。バイオリン」

幼いころから、俺は楽器と触れ合っていた。

今では経験をつみ色んな楽器を使えるようになった。

「んじゃ、お詫びの一環でリクエスト聞くよ。言ってくれ。」

「良いんですの？では・・・グリーンスリーブスを・・・。」

「ああ・・・なるほどな・・・。」

グリーンスリーブスってのはイングランドの民謡曲でも有名で、イギリス

映画とかにも良く使われてる曲なんだが。俺とセシリアが初めて出会ったときに

俺が弾いていたバイオリンの曲だった・・・。

「・・・じゃいくぞ?」  
「・・・ええ・・・。」

演奏中・・・

俺の・・・俺たちの思い出の曲は昔の俺とセシリアの記憶をトリックさせ、懐かしい  
暖かい感じに包まれた・・・。

「・・・とてもよかったですわ。」  
「ありがとう。」

「・・・」  
「・・・」

・・・何か変な空気になった・・・が。

「・・・そろそろ寝ないとな」  
「え?あ、ええ・・・そうですわね。」  
「じゃ・・・シャワー入ってくるよ。」  
「ど、どうぞ。」

シャワーに入り、出た後は俺もセシリアも寢床についた。

「・・・あの・・・イサカ・・・。」  
「懐かしい呼び方だな、なんだ?」  
「私と織斑一夏・・・どちらを応援するのかしら?」

なるほど、そういうことか・・・。

「ははは、といわれてもな・・・どっちも頑張れとしかいえんな。」  
「それはズルいですわよ、どっちか選んでくださいまし。」

まあ、そうなるよな・・・じゃあ。

「お前を応援してやるか。」

「えっ？」

「ん？どうした、応援して欲しくないのか？」

「いや・・・その・・・してもらいたいですけど」

「なら素直に受け取っとけよ」

「・・・わかりましたわ、イサカ・・・貴方の応援うけますわ」

「うん、素直でよろしい、じゃあ俺は寝る。おやすみ」

「え、ええ。お休みなさいまし。」

・・・

「・・・イサカ・・・？」

「・・・」

「イサカ・・・寝ましたのね・・・ふう・・・これでは私の一人  
負けですわね。」

緊張で上手く眠れないなんて・・・。」

朝起きると親友（笑）からメールが届いた。

「調子はどうだ奏。俺はすごぶる良いぜ^^b

お前の荷物の中にあるIS見てくれたか？

見てないのならチェックとかよろしくな。

それと女の子との相部屋おめでとう！

色気のない君にスイートな一時を願って……。  
親友より」

……目の前にいたらぶっ飛ばしてるところだが許そう俺は優しいからな。

ISってことは俺専用のISか……見てから食堂いこ……。  
……セシリアはまだ寝てんのか……。

「声が小さい!!振りが遅い!!」

「う、うおおおお!!」

「……おいおい。」

今俺は道場にいる。理由は一夏が特訓すると聞いたので見に来たからだ。

箒にISについて学ぼうとした一夏だったが、なぜか剣の稽古をさせられているらしい。

「腰が甘い!こんなに弱くなかったであろうが!一夏!!」

「ほ、箒!そろそろ勘弁してくれえ! ハア……ハア……」

「ならん!これではIS以前の問題だ!!」

「そんなあ……」

見事にズタズタにされた一夏だけがのこった。

これ……大丈夫なのか?

## 第二曲 相部屋と特訓の章 (後書き)

というわけで第二曲完！

今日だけで頑張ったよ・・・おれ・・・

現時点で勇歌くんのヒロインはセシリアですが、増える予定です。  
感想、応援などできればよろしくお願いします。

ちよおまw良く見たら特訓の場面ってほとんどなかったwww

## 間奏 主人公設定の章（前書き）

主人公 奏 勇歌の設定について明かす話です。

## 間奏 主人公設定の章

個人情報とは護られるべきもの……これは確かな話です……。  
しかし小説の登場人物である俺は人権があるのだろうか。

少なくとも今から書かれてることは個人情報だよな？ そうだよな？  
作者「恥ずかしがることはない、別に書いてしまっても構わんのだから？」

……好きにしてくれ。

名前 ……かなで 奏 いさか 勇歌

身長 ……173cm

性別 ……男

容姿 ……これにつきましてはアンケートをとりました。

セシリア・オルコットさんより

彼は織斑一夏のようにある程度整った顔立ちをしていたり  
するわけでは

ありませんわ。男らしい……といえるでしょうね。

髪の色は赤よりの茶、後ろで髪を縛ってますわね。

解けば長いと思いますわ。

親友（笑）さん

奏？ そうだな、極端ではないがモテてはいたな。  
顔はイケメンってほどではなくてもなかなか男前ではあるし。

身体は凄く引き締まってるな。筋肉は整ってる。  
あれで音楽の演奏やるんだ、かつこ良く見えるだろうなw  
あとそれからポイントは瞳が赤系ってところかな。

備考 ・日本人の父とイギリス人の母の間に生まれたハーフ。

ともに音楽家だった父と母は空港の事故で亡くなり、イギリスの親戚に

一人。  
預けられたがほどなく自ら望み日本へとむかった。現在は

イギリスにいたときにセシリアと幼馴染になった経緯がある。

親友（笑）には感謝はあるが巻き込んだ事に対して若干恨む。  
いまは気にしてない

ISに対する思いは強くないが、気にはしつつある自分を自覚している。

音楽は彼の両親とのつながりのひとつであり愛するものである。

自己紹介時に蜂蜜が好きといていたが、喉に良いからである。

続きまして本編未登場の専用ISについて

IS名：零幻

製作者：親友（笑）

世代 : 第三世代改

待機 : 腕に巻けるくらいの数珠

親友（笑）プロデューズ、奏のためのIS。  
名前の由来は単一使用能力ワンオフアビリティから。

第三世代だがその欠点を払拭し燃費がよい。  
特筆すべきはシールドエネルギーの総量で、通常のISの1・8倍である。

ハイパーセンサーの感度が高く、かなり敏感。

単一使用能力 鏡花風月きょうかふうげつ

この能力は、ISコアから特殊な音波を発生させ。  
機械には誤認識ジャミング、人間には脳に働きかけて幻覚作用などを引き起こさせる能力である。

零幻そのもののヘッドパーツがこの音波を阻害する素材でできている、  
使用者には通らない。

武装

・帝釈天たいしゃくてん

錫杖しゃくじょうの形をした零幻の主力武装。

振るえば強力な衝撃波や稲妻を起こす。先端部が鋭利なため  
槍として扱うこともある。近・中距離戦闘に適している。

・阿修羅あしゅら

オールレンジ系の武装で、展開後は操縦者が意図的に解除するか、  
破壊されるかまで常に零幻の周りを飛び回る。勾玉の形をしている。  
る。

全部で八つあり、零幻にバリアーを張ったり敵機に突撃させダメ

―ジを

与えるなど凡庸性に長ける。

・月読つくよみ

現在はまだ試作型のハンドレールガン。2丁装備している。

## 間奏 主人公設定の章（後書き）

はい、これで終わりです^^

次はセシリアVS一夏です。

感想や応援おまちしてます〜（^o^）／

### 第三曲 決闘の章（前書き）

今回は二人の人物、奏とセシリアの視点でお送りします  
第三曲です！

### 第三曲 決闘の章

ISによる決闘とはシールドエネルギーを0にすることにより勝利が決するのである。これは常識。

決して0になったから壊れたりするわけではないが、危険だからな。命のとりあいにならないのは良い限りだ……。

だが……心配といえば心配だ。……事故とか……な……。

「結局、筈からISについて何も教えてもらってねえな。」

「ほ……う……き……」

「……」

「目をそらすなよ……」

いや、剣の稽古は強敵でしたね……。

だがな一夏よ、お前はもう後戻りは利かんぞ。

「ま、仕方ないって。ぶつつけ本番ってやつだ。知識や基礎を知らないのは

お前の自業自得だし（笑）」

「く、くそー！」

セシリアのやつは専用ISがあるし、経験も豊富だ……。

心の準備はしとこつ。

「お、織斑君織斑君織斑君っ」

ん？なんだ先生慌てて。

「山田君、落ち着け。深呼吸だ」

「は、はいっ。す~~~~~は~~~~~す~~~~~は~~~~~」

「・・・はい、でなんですか？」

「織斑君来ましたよ！織斑君の専用IS！早く来てください」

「おお！俺のIS!？」

おお、一夏にも来たのか専用のISが。

少しは一夏も希望が見えたか？

「そちらのピットにある。山田君、頼んだ。」

「はい！では開きますよ

プシュッ

・・・おお、白い・・・ISだ。

「これが！織斑君の専用IS『白式』です！」

「これが・・・俺の・・・。」

ほう・・・やっぱり俺のとは違うよな、誰が作ったんだコレ？

「時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。  
できなければ負けるだけだ。わかったな」

なんと、完全ではない状態での戦闘か・・・不利だな。  
とはいえ、一番に重要なのは一夏の腕前なんだが。

「第」

「な、なんだ」

「行ってくる」

「……行って来い、絶対に負けるなよ／＼」

「ああ、任せとけ」

おお、熱いね。28けるわ（笑）

「！何を笑っている！！」キツ

「おっと、申し訳ない。」

さて……一夏は行ったか……。

じゃあ、客席で見させてもらうか。どちらが勝つかを。

視点はセシリアへ。

「……遅いですわ。」

早めに来すぎたかもしれませんわね。

いえ、それとも恐れをなして来ないのか……。

！ やつと来ましたわね。

「あら？逃げずに来ましたのね、てっきり、負けるのが怖くなって逃げ出したのかと思いましたのよ？」

先手必勝、これも戦術とお先にロックさせてもらいますわ。

「そりゃ悪かったな遅れて。しかし不戦勝じゃなくなっ

残念じゃないのか？」

「ムツカ！ また私を侮辱しますのね！ 良いでしょう、格の違いを教えて差し上げますわ！ 喰らいなさい！」

あのむかつく笑顔を粉碎して差し上げますわ！

バウンツ！！ バウンツ！！ バウンツ！！

！ 思ったより小回りが利きますわ……。厄介な。

「どうした！？ 当たってないぞ！」

「ちい！ ちょこまかと！ では、これならいかが！？」

『踊りなさい！！ わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲フルツで！』

「！ オールレンジ攻撃か！」

「どこまで逃げ切れますかしら！」

ふふふ、どれだけ足掻こうとこの数の攻撃は避けきれないでしょう！

「なら！ 肉を切らせて！」

！ まさかイグニッションブースト、早い！

「骨を絶つ！！」ズガァン！

「ぐっ！」

油断しましたわ、一撃もらうなんて……。ですが！

「隙だらけですわ！！！」

「しまっ！ レーザーとミサイル！？」ズガァン！

・・・ふふふ・・・ふふふふ・・・。

「あつけないものですわね。」

あ・・・イサカ・・・見てくれていますわね。

どうです？私強わたくしくなりましたでしょう？

「・・・フツ・・・あの馬鹿者、機体に救われたな・・・。」

「え！？？」

そんな、ファースト・シフト一次移行！？

「今まで、初期設定の機体で戦っていたんですの！？」

「・・・いくぜ、セシリア・オルコット！」

「！？？」

「零落白夜！！！」

なんですのこれは？

ワンオフアヒリナイ  
単一使用能力？

あの武器もレーザーブレードに・・・。

アレは・・・まずい！

「これで決めてやる！！！！うおおおおお！！！！」

くっ・・・負けない・・・負けませんわ！

「この！！！！障害イ！！！！！！」

ガッ！！！！バウンツ！！！！

「ガハッ！」

「グッ！」

ピーッ！！！！！！

シールドエネルギーが……0に……負け……ですの!？  
なんて威力でしょう……ぐっ意識が……。  
……イサカ……。

勇歌さん視点です

ピーッ！！！！！！

「これは……ええと……同時にシールドエネルギーが0なので。」

「引き分けだな……。」

なんと……凄いに……。

……!!セシリアのやつ!!!!気絶してる!？

一夏は気づかんか!ええい!間に合え!!!!!!!

「零幻!!!!!!」ガシャン!

鏡花風月! シーン!シーン!

「うっ!何の音!?!」

「あ、死んだお爺ちゃんが目の前に」

「ハッ!お母さん!?!私はまじめですよ!本当ですよ!」

「これはいつたい!？」

「奏のISだな、聞いてはいたが・・・」

はは！悪いけどジャミングしてるんで困いは無いも同然だ！

「なんだ？え？奏どうし」

「セシリアー……！！！！！！！！」

……ふう……ギリツギリだな……。

……本当に……心配させやがって……。

……

「……ん……ここは？」

はぁ……目が覚めた。

「ここは医務室だよ、お前気絶したんだよ。」

「・・・ええ、そうでしたわね。私・・・負けたんですわね。」  
「いや実は「引き分けだ、オルコット」・・・。」

織斑先生急に現れないでよ、心臓に悪いぜ・・・。

「引き分け？どついう事ですか？」

「簡単な話同時にシールドエネルギーが無くなったのだ。

白式の零落白夜はシールドエネルギーを消費して行う単一使用能力。相手のシールドエネルギーを無視で攻撃できる代わり自分もいったところだ。」

「・・・そうだったんですの・・・。」

確かにヤバい単一使用能力だが、諸刃すぎるな・・・。

「奏に感謝しておけ、こいつが飛び出さなければお前は地面と衝突していたのだからな」

「・・・え・・・。イサカ・・・本当ですか？」

「ん？まあ・・・な・・・。ビックリしたんだぜ・・・ホント。」

「・・・あ、」

「ん？」

「ありがとうございますわ、イサカノノ」

「・・・礼にはおよばねえよ・・・。」

くそっ・・・何か恥ずかしいぞ。

はっ、いま明らかに一瞬織斑先生ニヤツってしたよな？だよな？

「本来なら、生徒を巻き込んだの能力使用や無断でISを装着したことを

咎めるところだが・・・。」

「……………」

「……………今回は許そう、人を助けるためにやったのだから。」

「……………ありがとうございます。」

「次は無いと思え、わかつたな。」

「はい。」

「まあ被害にあつた生徒は、さほど気にはしていないようだったが謝っておけ。」

「わかりました。」

「では……………邪魔なようだし私は消えるか。」

「へっ?」

「ではな。」キイツガチャン……………

……………うーん……………どうしたものか。

「イサカ……………」

「……………はい?」

「私……………強くなっていました?」

「……………ああ、強くなったよ……………昔より、ずっとな。」

「……………良かったですわ、そう言ってもらえて……………」

「……………セシリア。」

「?」

「……………別に引き分けでも一つ位なら願い聞いてやっても良いぞ?」

「えっ?」

「いや、お前今回頑張つたしな……………つと。」

らしくねえ事言ってるな俺……………自分でも凄く思う……………でもホントに強くなったよ。

「……………では、また部屋であの曲を……………お願いしますわ。」

「……………いいのか?それで?」

「良いのですわ、私がそう言ってるんですから。従ってくださいまし。」

「ふむ、分かったよ。じゃあそれで。」

・・・好きだな、あの曲・・・俺もだけど・・・。

「ではクラス代表は織斑一夏くんです！」

「「「「はーーーーーい！」「」「」」

そして結果的にはなんだが、代表は一夏に決定した（笑）

「なんで俺！？引き分けだったじゃないか。」

「投票時にお前にしか票が入ってなかったんだ、当然だろう。」

「理不尽だー！……」

ま、俺にとっては関係ねーやっつと。

### 第三曲 決闘の章（後書き）

第三曲完！

ほむ、何とか色々固まってきた感です。

初主人公IIS登場！ヒュー！

そして方針なのですが、ラウラ参戦までは

主に原作の合間に何かオリジナルなことを、

そしてそれ以降は完 全オリジナルにしようかなと模索しています。

では感想、応援などなどよろしくお願いします＼（＾o＾）／

次回は・・・セカンドかな？

## 第四曲 ファーストVSセカンドの章(前書き)

今回は主に勇歌と一夏の視点です。  
では第四曲・・・開幕！！

#### 第四曲 ファーストVSセカンドの章

女と女の争いってのは恐ろしいと言う。

何というか殺伐としているとか、逃げたくなるとか。

でも実際目の当たりにせんと分からんものだ・・・。

いや、俺は実際目の当たりにしてしまったんだがな・・・。

いやー、今日も良い天気だ。

快晴の空だ、太陽がぽかぽかと気持ち良い。

昨日の一夏は大変だったな、飛行操縦の実践でもろに地面に激突してたしな(笑)

ISの強度に驚かされるよ。

セシリアは一夏を織斑？さん？と呼ぶようになり、少しは仲良くなれたのかな？

「ほんと無駄に広いわねこの学園！！」

ん？誰だあいつ、見たことはないが・・・。

「はあー、一体どこにあるのよ」

「どうしなすった？」

「えっ？」

ふむ、かわいい女の子だな。まさか転校生とか？

「何か困ってる感じだったか？」

「えーと・・・この学園の生徒？」

「そうだが？」

「ふーん・・・あ、ここ教えてもらえると嬉しいんだけどさ。」

迷ってたようだな、まあ広いしな。

「ここは、本校舎一階総合事務受付か。暇だし案内してやるか？」

「ホント？ありがとう、この学園広すぎてわからなかったのよね」

「まあ、気持ちはわかるよ。おつとこつちだ。」

「そういえばまだ名前も言ってなかったわね。私の名前はフマリンイン鳳鈴音、あなたは？」

名前からして中国系だな、また代表候補生だったりしてな（笑）

「俺か？俺は奏勇歌だ。よろしく。」

「奏勇歌ね、よろしく！・・・あ、でさ。」

「ん？」

「あんたさ、織斑一夏が何組か知ってる？」

ほう、一夏の知り合いか。

「ああ、あいつは俺と同じ1組だが。」

「1組ね・・・オツケー。」

・・・何か悪そうな顔したぞこいつ。

「あ、もしかして受付ってあそこ？」

「ん、ああそうだな。」

「そっか、案内ありがとう！今度お礼するよ！」

「ところでお前は一夏とどついう仲だ!？」  
「……幼馴染!」

え……行って行っちゃったな。  
ふむ、と言う事は箒も知ってるのかな? あいつを。  
聞いてみるか。箒と一夏に。

一夏視点へ

現在俺は箒と部屋にいる、ISについて予習などをしている。

「……ところなるわけだ……わかったな、一夏?」

「ああ、理解できた」

「よし」

箒のおかげで勉強が順調に進んでるのは本当にありがたい。  
幼馴染のありがたみを味わったよ。  
コンコンッ ん?

「どちら様?」

「勇歌だ、入って良いか?」

「おう、勇歌。入っていいぞ」

勇歌か……いったい何の用だろうか?

「どうしたんだ?」

「いや実はさ、さっきお前の幼馴染を名乗る奴にあってな。」

「……(びくっ)」

「俺の幼馴染って名乗るのは……。もしかして鈴音って名前か？」  
「そうだ。そう言っていたな。どうやら合っているのか？」  
なるほど鈴か、しかしなぜ鈴がIS学園に？

「ああ、鈴は俺が小学5年生から中学2年生ぐらいまで日本にいた幼馴染だよ。」

「へへ、そうだったのか。」  
「……………おい、一夏。」

ん？何だろう？寒気が…………。

「どうした？筈？」

「そんな奴私は知らんぞー！」

「うわあ！」

「うおお！」

「どういふ事なのだ!!！」

何で怒ってるんだ！？何で!？

「それはお前が転校したのと同時期ぐらいに鈴がやってきたからだよ！」

「何?……………」

「分かったか…………？」

「…………分かった。」

ふう…………何とかなった。

「とにかくそういう事なんだけど、何で鈴がIS学園にいるんだ？」  
「そんなのは分からんよ、だが事務室に行ってたし…………転校？」

「そうか・・・。」

「ま、俺は真偽がはっきりしたし、先に食堂行ってくるぜ。パーティー

には遅れるんじゃないぞ。一夏、箒。」

「わかった」

視点は勇歌に戻ります。

いやあパーティーは楽しかったな。

一夏はやっぱり弄られるというか、様になってるな(笑)  
それもどうかと思うが・・・ん、あれはセシリアか。

「あ、イサカではないですか。パーティーは楽しかったですね。」

「ああ、楽しかったな。一夏の炭酸一気飲みは真似できんわ。」

「あれはむしろ危険なのは・・・。」

「まあ、酒なら危険だとは思いますが。大丈夫じゃないか？」

「まあ、実際に問題はありませんでした。」

「・・・ところで少し一緒に散歩でもいたしません？」

「お、いいぜ」

散歩か、そっぴゃこんなにゆっくりした事もなかったっけか。

・・・って腕組んできた！だ、大胆になったな・・・セシリア。

「・・・」

「・・・」

ホントに散歩してるだけだから話すことが思い浮かばんな・・・う  
む。

「・・・あら、あれは？」  
「ん？」

あれは・・・一夏と箒と・・・噂の凰鈴音が・・・。  
何してるんだ？・・・まさか・・・。

「もう一度言ってくれるか？良く聞こえなかった。」

「一夏を貸してって言ったのよ、良いでしょ？」

「ほう、お前は一夏を物のように扱うのだな。」

「幼馴染だし別に良いじゃないそんなの、そう言うあんたこそ一夏の何なのさ？」

「幼馴染だ。お前同様な。」

「へえ、私は貴女なんて知らないけどね。」

「その言葉、そっくりそのまま返してやる。」

・・・すげえ、何て言うかバリバリと火花が散ってるなこれ。  
初めて見たよ女と女のマジの睨み合い。

「これは一体・・・。」

「ああ、実はあそこにいる奴は一夏のもう一人の幼馴染なんだと。」

「箒さん以外にもいたんですわね、織斑さんの幼馴染は。」

「そうらしい。」

「・・・イサカは？」

「ん？」

「イサカには私以外に幼馴染はいませんか？」

・・・急に何を言ってるんだこの子は。

「いねえよ、幼馴染はセシリアだけだ。」

「本当ですね？嘘偽りなく？」

「・・・俺を信じる。」

「・・・は、はい。信じますわ。」

ふむ、しかし近寄りがたいな。

「・・・なあ、何でそんなに睨み合ったりするんだ？

仲良くし」「夏は黙って！」「・・・はい。」

よえ〜（笑）

まあ、確かに恐いから仕方ないか？

「お前の存在まかりならん・・・後日、決闘を申し込む。」

「ふん、良いわよ！受けてたつわ！」

うお、いきなり決闘を申し込んだぞおい。

箒も鈴音も血の気が多いな。

ぶいっつと踵を返す鈴音、ん？こっちに来たぞ。

「勇歌じゃん。昼はありがとね。」

「ああ、どういたしまして。」

「・・・ふうむ。」「ジー・・・」

「な、何ですか？」

「勇歌はこの子と・・・付き合ってたの？」

「！　な、何をそんな！／＼／」

「仲は良いぜ、付き合っただけじゃないけど。幼馴染だし。」

「・・・そっか、幼馴染ね。凰鈴音よ、貴女は？」

「へ・・・せ、セシリア・オルコット。イギリス代表候補生ですわ。」

「おお、そうだったんだ。あたしは中国の代表候補生だよ。」

あ、やっぱりそうだったのか。なら強いだろうな。

「よろしくね、セシリア。」

「ええ……よろしくですわ。」

仲良く握手。

ふむ、セシリアとは穩便に済んだか……。

「いつか刃を交えてみたいわ。」

「ええ、そうですわね。」

前言撤回、セシリアも血の気が多い奴だったわ。

「じゃあまたね！明日も会うことになりそうだから！よろしく！」

そう言ってパツパと退散していった。

一嵐……来そうだけ……。

#### 第四曲 ファーストVSセカンドの章（後書き）

第四曲・・・いかがでしたか？

鈴の登場の仕方を全く変えてみましたが・・・どうでしょう？  
展開も変えていますので、頑張ります。

感想、応援、ご指摘、待ってまーす＼（＾o＾）／

## 第五曲 幼馴染の章（前書き）

第五曲開幕でござい！

原作とは全く違う展開です。ご了承ください。

二次創作ですよ

## 第五曲 幼馴染の章

日本と中国は隣りあわせて生きてきた。

日本が中国を中国が日本を真似てお互い力を大きくしていった。

戦争もあつたが、同じアジアの国としてこれからも仲良くしていきたい。

・・・今から起こる争いは国の威信では無く、女と女の意地をかけた？戦い？なのである。

「知ってる？中国から転校生が来たんだって。」

「へえ、どんな子なんだろう。」

「噂では織斑くんの幼馴染なんだとか。」

・・・すでに噂として広まっているか。

ホント女子の口コミの早さには恐れ入る。

朝のホームルームに向かう途中の周りの会話を拾ってるだけなんだがな。

しかし、鈴音のクラスはどこになるんだ？

・・・まさかとは思うが1組なんて事はないよな。

「では転校生を紹介しますね、入ってください。」

・・・マジかよ、こんな事があるんだな。

「では、自己紹介を……。」「  
「私の名前は鳳鈴音よ。中国代表候補生なの。皆3年間よろしく！」

おおう、元気いっぱいだな。

「代表候補生二人目よ！」

「1組って凄くない？」

「うん！何せ専用機持ちが4人だもんね！」

ざわついている……当然だよな。

「……………」ジロツ

「……………」キツ

おいおい、二人は早速戦闘モードか？

「静かにせんか、馬鹿共が。」

スパアンスパアン！

おお、やっぱり良い音だな。俺やられたこと無いが。

「げっ、千冬さん！」スパアン！

「織斑先生と呼べ、鳳。それに何だその反応は。」

「す、すみません！」

ほう、織斑先生は苦手なのか。昔何かあったのかな？

「で、では、鳳さんの席なのですが。奏くんの隣でよろしいですか

「？」

「勇歌の隣か。良いですよ。」

「奏くんもそれで？」

まあ、鈴音なら別に。

「構いませんよ。」

「では決定ですね。」

「……よろしくね、勇歌。」

「おう、よろしくな。」

「一夏（手を振ってる）」

「ん、おう。（手を振ってる）」

「……」

「……（ニヤリ）」

「！……（ムカツ）」

……凄く……険悪だな……。

やっと放課後。

はあ、疲れたぜ。授業中も事あるごとお互いを意識して  
オーラ（しせん）をぶつけ合ってたからな。

見てるこつちが消耗するって……。  
む……。もうおっぱじめる気か？

「では……で良いな？」

「……わよ……から！」

……ん？遠くてよく聞こえなかったな。

「では、時間もあまり無いな。ゆったりはしてられん。」  
「許可も取らないと、無断で使用はいけないでしょ。」  
「では行こうか。」  
「ええ、決闘場へね！」

やっぱりこうなったか。予測はしてたが。  
しかし、箒は専用ISないだろ？不利じゃないか？

「あ・・・勇歌く良いところに！」  
「ベストタイミングだな。」  
「は？」  
「少しお願いあるからついて来てよ。」  
「よろしく頼む。」

なにになに？どういう事だ？  
何で決闘に俺が必要なんだ？  
・・・まあ、いいか。

「わかった、いいぜ。」  
「さっすが、話が分かる！」  
「はあ・・・」

どういうことだ？

・・・こういう事かよ。

「では、決戦！幼馴染料理勝負です！！」パッパラパー SE担当：



「はあ・・・はあ・・・失礼。」

では、次は審査員を紹介いたします!!」

「「「「「おおおおおおー!!!」」」」」

「今回の審査員は何と!

織斑一夏くん!奏勇歌くん!

さらに!審査委員長は織斑千冬さんです!!」

「「「「「きゃあああああああ!!!」」」」」

ぐわ!久しぶりの音波だ!

「では、審査員からそれぞれ一言を。まずは一夏くんから。」

「あ、えーと・・・二人の料理がどうなるのか楽しみです。」

「・・・それだけですか?」

「はい」

「「「「「えー?」」」」」

「な、なんだよ?」

まあ、一夏だもんな。仕方ないわ。

「え、ええと・・・次は奏くん。」

「はい・・・二人の話を聞いたとき正直こうなるとは思って  
みませんでした。ここまで来たら仕方が無い。」

俺なりに公平に料理を審査するつもりです。よろしくお願いします。

「

「「「「「おおー!」」」」」

「頑張ってくださいましー!イサカー!」

む、セシリアか。しかし主に頑張るべきはあの二人なんだけどな。

「では最後に織斑先生より……。」  
「お前たち。」

「……。」  
「たやすく私を唸らせれるとは思ってはいまいな。」

「はい……。」

「フツ、精一杯やれ。期待させてもらおう。」

「はい！」

さーて、盛り上がってきたなどなることやら。

「それでは、今から30分以内に作ってください！」

「……。」

「レディー……。ゴー……！！……。」 バタンッ

「ああ、やまやま倒れた！担架だ！」

「……。」 おう！「……。」

凄……チームワークだ……。

「……つと先生が倒れてしまったので、私セシリア・オルコットが  
司会と実況を担当いたしますわ！！」

「……。」 おおおおおおおお！！！！！！「……。」

切り替え早ッ！

「さあ、両者とも用意に入りましたわ！

さて、どうなるのでしょうか！この勝負！」

「……。」

「イサカ、いかがでしょうね。」

この二人の実力のほどは。」

「ふむ、話によると鈴音は料理屋の娘だったらしいから期待大だな。」

「箒については何とも言えん・・・未知数だ・・・。」  
「なるほど！適切な発言ありがとうございますわ！  
つと二人とも鉄鍋を持ち出しましたわ！  
いったい何を作るのでしょうか!？」

セシリアもテンション高いな、  
司会ってこうでないといけないもんなのか？

「一夏への料理・・・なら!」「」

チツチツピピー

「では時間ですわ！作業をやめてくださいますし!」

ざわ・・・ざわ・・・。  
さてどうなったかな？

「まずは箒さんからどうぞ!」

「・・・一夏。」

「ん？何だ？」

「しっかり味わうのだぞ。」

「あ、ああ。」

「これが私の料理だ!」バツ

これは、から揚げか！

「から揚げか・・・ふむ。」

「では、どうぞ。審査を。」

ではいただくか。  
あむっ……。

おお。これはうまい。

「ジューシーな肉汁、カリッとした皮。  
程よいにんにくと生姜の利かせ……。

この酸味はレモンだな、予めかけておいたのか。」

「あ、ああ。」

「塩加減も絶妙だな、きつと俺じゃ真似できない  
領域だ。……うまいぞ！このから揚げ！」

「！そ、そうか……喜んでもらえて私は嬉しい／＼／」

やべえ、一夏の解説が完璧すぎて淀みがねえ。  
主夫だなあ……。

「……………」

織斑先生無言だな……。

「では次は鈴さんですわ！」

「うし！一夏、きつとこれは満足できるよ！」

「お、おう。何が出るんだ？」

「フフフ……これが私の料理！！！」カパッ

おおお、これは酢豚か！

ウマそうだな……。

「酢豚……そうか、なるほど。」

「……………では審査をどうぞ……………」

ではいただきます。

・・・おお！これもウメえ！！

「火のとおり加減が丁度良いな。

それに舌にしつこく残らないさっぱりとした旨みだ。

このソースも上手くまとまってる・・・。

サンツアーピン使ったな？」

「！ 良く分かったわね・・・。」

「親父さんの教えがきいてるんだな・・・。

腕を上げたな、鈴。」

「！ と、当然！私あの後頑張ったんだからね！」

相変わらず冴えてるぜ、一夏はよ。

「・・・・・・・・」

？ 織斑先生また無言か・・・。

「では三人で審査に入ってくださいませ！  
審査結果は三人の相談の上だしますわ！」

相談の上かさあて。

「二人ともこっちへ来い。」

「「え？はい。」」

「・・・で、どうするんですか？」

「うむ・・・この勝負引き分けた。」

「・・・それは・・・どういう・・・。」

「それはな・・・。」

「長らく・・・お待たせしましたわねお二方・・・。  
結果が出ましたわ!」

「「「「「おおおおおおおおお!!!」「」「」「」  
「ついに・・・結果が。」

「私は出し切った・・・後は天に任せるわ。」

・・・二人とも可愛そうだな・・・でも仕方ないか。

「では!審査委員長!結果を!」

「うむ・・・今回の料理勝負・・・結果は。」

ジャラジャラジャラジャラチーン!!! SE担当・勇歌

「・・・・・・・・・・引き分けた。」

「「・・・・・・・・・・え!?!」」

「引き分け・・・・・・・・・・ですの?・・・・・・・・」

「その通りだ。」

「「理由を教えてください!」」

「良いだろう・・・それはな。」

お前たちのレベルが一夏に及んでないからだ。」

「「!?!?」」

「言つたらもう簡単に私の舌は唸らせんと。」

よって、この勝負は引き分けた。」

・・・・はいそうなんです。

一夏より料理が上手い・・・

一夏をもらつたための最低条件の?一つ?らしい。

・・・鬼だこの人・・・。

「くっ・・・まさかこんな事になるとは。」

「ううー、悔しい!!」

「・・・でもさ、箒だっけ？あんたやるじゃん。」

「え？」

「さっきちよつと摘んだけど、美味しかった。」

「・・・ふう、鈴だったか・・・お前こそやるな。」

「ふふふ、でも今回は引き分けたけど次はそう上手く行くとは思わないことね！」

「もちろんだ！次は勝つ！」

おお、友情が芽生えた・・・訳でも無いけど。

空気が柔らかくなったな・・・。

「あの二人もどうやらもういがみ合っではないようですわね。」

「ああ、恋の宿敵ライバルとしてお互い認知したんだな。」

「恋の宿敵ライバル・・・ですか・・・。」

・・・まあ、こうして一騒動が去った。

マジ疲れたぜ・・・。

## 第五曲 幼馴染の章（後書き）

終わった！第五曲完！

オリジナルゆえ元がなくなっちゃった。

が、書ききった！【やったー！】

てな訳で、次回はシャルとラウラかな？

感想、応援、ご指摘！オマチシテマース（＾o＾）／

## 第六曲 二人のシャルルの章（前書き）

第六曲開幕です。

今回も普通なら無い展開です。

原作沿いではありませんが、オリジナルです。

そして、今回予定変えてラウラさん出てきません；

ブラックラビッツ党の方もうしばらくお待ちください m ( ( m

## 第六曲 二人のシャルルの章

一卵性双生児ってのは基本的に全く同じ遺伝情報（遺伝子型）を持っている。だから顔とか好みとかが良く似ている。でも性別については一概に同じにはならない。基本は同性とは言うが異性で生まれる場合もあるんだってよ。・・・いや、今のはただ興味本位で調べただけだよ。

青年演奏中・・・

「・・・ふう・・・」

「お疲れ様、良い演奏でしたわ・・・」

「ああ、ありがとう。さて授業に行きますか。」

「ええ、いきましよう」

早朝からの演奏、今回は管楽器だ。

朝に金管よりは木管の方が俺としては耳に優しく思う・・・。よって今回はフルートでエニグマ変奏曲を吹いた。

この曲はエドワード・エルガーと言うイギリスの作曲家が作曲したオーケストラ用の曲だ。セシリアのリクエスト。

セシリア、最近俺が演奏するタイミングを見計らった様に部屋に戻ってきて曲のリクエストをするようになった。

まあ、リクエストはありがたい。決めかねてるよりはずっとな。ただ演奏時に隣に座って密着してくるのは凄く気になってしまつて集中が・・・な？・・・。



「静かにせんか。山田君、話を進める。」  
「す、すみません；」

おう、静まった。

織斑先生も流石だぜ。

「では、実は転入生が来ています。それも二人です。」  
「「「「え！？マジですか！？」」「」「」

「すげえなこのクラス、何人入ってくるんだ？  
しかも今回は二人同時か。」

「ではどうぞ、入ってきてください。」

入ってきたのは全く同じ見た目の美少年？二人だった。  
濃い金髪を後ろで縛り、細身ほそみで短身たんしんだ。

「……えつと……とりあえず自己紹介を。」

「はい。」

「わかりました。」

ん、若干だが声のトーンが違う？

「初めまして、シャルル・デュノアです。」

「この国の事は良く分かりませんが精一杯頑張ります。」

「初めまして、シャルル・デュノアです。」

「フランスから来ました。仲良くしてくれると嬉しいです。」

「名前同じかよ！（笑）判別つかないだろ！（笑）」



ふう、やっと落ち着いた。  
おっとシャルル兄がきた。

「よろしくね・・・えつと。」

「奏勇歌だ、よろしく頼む。」

「イサカか、よろしくイサカ。」

「ああ、シャルル弟。お前もよろしくな。」

「へっ？あ、はい。よろしくお願いします・・・。」

・・・上の空って感じだな・・・。

「・・・・・・・・・・(ジー)」

「うつ・・・・・・・・うつ・・・・。」

授業が終わったの昼休みの前。

あの後もシャルル弟の様子がおかしく感じられた。

着替えが妙に早かったり、他人の裸を見て顔真っ赤にしたり  
肩に手を置いただけでびっくりしたり。

うむ・・・一夏は気づいてなさそうだが怪しいな。

で、今の現状を言いますと。

「「今・・・なんと?・・・。」」

「で、ですから部屋割りの変更をですね。」

「い・・・いきなり過ぎはしません?」

「そうです!いきなり過ぎます・・・。」

山田先生からのお達しで今部屋割りが変えられそうに

なっています。セシリアと箒は頑張つて説得しております。

「それにもし．．．もしですわ。男同士で間違いなどあつては！」  
「え、ええ！そんな！それは．．．確かに．．．。」

おいおい、何を言つてるんだ。つーかそれで揺らく先生もどうよ。

「素直に受け入れろ、お前たち。」

「「！ 織斑先生！納得がいきません！」」

「まあ、聞け。実はこれは考えがあつて決めたのだ。」

「「考え？」」

「そうだ、だからとりあえず今は従つてくれんか？」

考えか．．．どういう事だ？

「．．．仕方ありませんわね。織斑先生がそう言うのでしたら。」

「むう、仕方が無いか．．．。」

あそこまで真剣な表情マジで言われればな。

「よし、決まつたな。奏、ちよつと。」

「え？はい．．．。」

な、何だ？織斑先生が俺に何の用．．．？

「．．．これからお前はデュノア弟と同室にする予定だ。」

「．．．はい。」

「あいつは所々挙動不振で怪しい。警戒しておけ。」

「は、はい。」

「それと。」

「はい。」

「これからある人物から連絡が来る。その指示にできるだけ従って行動しろ。」

「はぁ・・・了解です。」

ある人物?・・・誰だろう。

部屋に戻るとそこにはシャルル弟がいた。  
何となくだがそわそわしてんな。

「よう!」

「! え? ああ、勇歌君か・・・。」

「なあにびつくりしてんだよ。」

そろそろ昼だし、一緒に飯食いにいかね?

「ああ、行くよ。ボクも食べに行く。」

「よし、行こうぜ。」

ピルルル・・・

「あ、すまん電話だ。」

「わかった、待ってるね。」

言われてはいたが誰だ?・・・って。  
・・・ピッ。

「よう奏エ、元気してたか。」

「おまえ親友かよ!」

何と、親友（笑）からだった。

「どうやら千冬さんはお前に伝えてくれたようだなよかったぜ。」

「・・・お前織斑先生とは知り合いなのか？」

「まあな、それより話があるんだが。」

「ん？」

「デュノアんとこの息子さん来てるんだろ？」

「ああ、来てるぜ。二人な。」

「・・・二人？おかしいな。」

「ん？どういう事だ？」

「デュノア家の息子は一人って聞いてたんだが。」

「・・・どういう事だ？」

「そこでお前ってわけ。実は調査をお願いしたい。」

「・・・俺なんか何に調査しろと？」

随分と急な話だ。

「何、簡単な話怪しい方から目を放すなってことだ。」

・・・確実に今後ろで待つてる奴だよな。

「わかった。それだけで良いんだな？」

「おう。」

「しかし、何でお前が急に突っ込んでくるんだ？」

「いやさ〜最近デュノア社は良い話聞かんからさ。」

もしかしたらな〜みたいなの？何か分かったらよ、連絡頼むわ。」

ああ、そうか。こいつ紛いなりにも次期社長だもんな。

情報網は色々ありそうだ・・・凄い・・・親友（笑）だ・・・。

「そうか、了解。」ピッ

さて……と。

「終わった。行こうぜ。」

「あ、うん！」

食堂はやっぱ広いな。

そして料理がうまいだなあ……これが。  
おばちゃんには感謝してるぜ。

「うわぁ〜おいしそう！」

「ははは、お前マジで嬉しそうだな。」

「だってこんな美味しそうなの滅多に……。」

じゃなくて！いつもはもっと豪華だよ、ハハハ！」

……うん……超がつくほど怪しいわ。

「イサカ〜、こっちですわよ〜」

「早くこっち来いよー。」

「おう、今行くぜ。」

座ってるないつものメンバー。

一夏、箒、セシリア、鈴、そして新メンバーのシャルル兄が  
先に座っていた。そこに俺とシャルル弟を加えれば7人。

そこそこ大団円だな。

「さあ、私の隣が空いてますわよ。(ポンポンッ)  
「はいはい(笑)」

わざわざ空けておいたのか。ありがたいね。

「じゃあ、ボクはその隣で。」

「おう。」

「じゃ、皆そろったし。いただきっ。」

「いただきまーす！」

皆一斉に食い始めた。

一夏と鈴は大盛りだ、良く食うな。

箸とセシリアはそこそこに。

シャルル兄は小食なのか？あんまり盛ってないな。  
ただ……。

「うわぁ〜おいし〜」

……この量はどうなんだ？

表すとシャルル弟>>越えられない壁>>一鈴>俺箸セ>シャルル兄  
と言った所だ。食いすぎだろ……JK……。

「こ、こらシャル……シャル落ち着いて食べなよ。」

ん、今言いなおしたか？

「だって兄さん……うん、ゴメン……」

気をつけるよ〜。もぐもぐ

……ふむ。

「そんな焦って食べなくても飯は逃げないぜ。」

「そうだぞ、ゆっくり食べると良い。」

「まあ、食べたくなる気持ちはすっごい分かるけどさー!」

うん、怪しんでないあたりこいつ等気付いてないな。  
分かってはいたけどよ。

「……イサカ。」

「ん?どうしたセシリア?」

「今のシャルル兄弟、おかしかったですわ。」

「……注意してくださいませ。」

「え?……ああ、わかった。」

セシリア……やっぱお前は一味違ったみたいだぜ。

「それはさておきやってみたい事が。」

「? 何だ?」

「はい……アーン……。」

「うお!」

「「「!!!!!!」」」

……これは何だ?公開処刑?

めちやくちや恥ずかしいノノノノ

でも恥ずかしいのはやり出した本人も同じか。

顔赤いもんな……。

うん、なら。

「アーン……。」

「……いかが?ノノノ」

「・・・うまいよ。」

「良かったですわ」

「よし！」

「ん？」

「一夏！アーン・・・」

「うおわ！」

あらら、箒と鈴のダブルアタック。

ありゃ大変だな（笑）

「・・・／／／」（いいなあ・・・アレ）

「・・・（ジー）」

「・・・分かってる・・・分かってるよ・・・。」

飯も終わり午後の部も滞りなく終わった。

後は部屋で寝るだけだ。

シャルル弟はシャワー入るために先行くと言ってたんで  
一緒にはいない。

「・・・。。。」

ん、シャルル兄か。・・・神妙な面持ちだが。

「よう、シャルル兄じゃねえか。」

「！・・・どうして分かったの？」

「弟はシャワー入るために先部屋行ってくてーからさ。」

「・・・そうなんだ。」

「・・・。。。」

「……………」

「…会話が弾まねえ。

お互いの事何も知らんからな…。

「ねえ……………」

「うん？」

「…………少し話しても良い？」

「いいぞ。」

「…………僕悩んでいるんだ。」

「…………何に？」

「今のままで良いのか……………」

「どういう事だ？」

「…………内容はいえないけどさ。僕は父にある命令を受けてここに来たんだ。」

「…………ああ。」

「でもね、その内容は僕からしてなんだけど…………。

凄く嫌なんだ……………」

「ふむ。」

「僕は今まで父の命に従って色んな仕事をしてきた。でも初めて…………この命令は嫌だ…………って思った。」

「……………」

「僕には…………分からない…………分からないんだよ。

嫌なのに…………苦しいのに…………。

僕はどうしたら……………」

はあ…………全く…………。

「…………無一物むいちもつって知ってるか？」

「え？」

「仏に会えば仏を殺せ、祖に会えば祖を殺せ、

何物にも捕われず、縛られず、ただあるがままの己を生きたこと。」

「……………」

「俺ならそうする。確かに親には世話になると思う。

でも心から嫌なら親でも子供を縛る権利は無いさ。」

「……………」

「ま、これは俺ならって話だけでお前にそうしろ

ってわけじゃない。普通そう言うのは自分で決めるもんだ。」

「!……………ああ……………」

「わかったか？」

「……………うん。ありがとう話聞いてくれて。

気持ちが悪くなったよ。」

「ん、そりゃ良かった。

じゃあ、俺は部屋行くわ。またな、シャルル兄。」

「……………ああ、またね。イサカ……………」

……………柄にも無く語ってしまったな。

……………部屋戻ろう。

- - 3 ) 4分後 - -

はい、着いたつと。

……………ドアの前に来て思ったこと……………。

そう……………またなんだ……………嫌な予感がする。

つてでも今回はシャルル弟〃男じゃないか。

男の部屋にノックの必要はほぼ無いよな？

てな訳で（ガチャ

「ただいま……………」

「……………」

・・・やべえ、デジャブ？  
そこには美少年では無く美少女がいた。  
シャワー後なのか、ほんのり赤みがさした肌。  
まだ乾ききつてない濡れた金髪。  
そしてたわわにみの（げふんげふん！！  
・・・まただよ（泣）

「キ、キ」

「ストップ（ピトツ」

「んー！！」

こんな場面見られたら絶対誤解される！！

「イサカ、やっぱり話があ・・・」

「げっ！」

「・・・」

「・・・シャルル兄これは違うんだ別にやましい事はない。」

「分かってるよ・・・とりあえず僕も部屋の中に入れてよ。  
事情を説明したい。シャルロットも服を早く着て。」

「あ？ああ。」

「う・・・うん／＼／」

・・・どういう事なんだ・・・これは・・・。

## 第六曲 二人のシャルルの章（後書き）

・・・つてとここで今回の曲は終わりです。

第六曲完！

・・・オリジナルすぐることになったww

双子・・・やってる人いるのかな？・・・w

続きは間奏挟んでって事になるかもです。

感想、応援、ご指摘などお待ちしてまーす＼(^o^)/

第七曲 デュノアの秘密の章（前書き）

第七曲開幕！

いつも通りオリジナルですので。

でははじめます。

## 第七曲 デュノアの秘密の章

秘密は誰にでもかは分からんけど持っているもんだ。

俺だつてあるぜ、一つや二つな。

普通は他人に話したくないもんだよな。こつこつ事って。

・・・でもこればかりは話さねえとな。

とりあえず、場は整えた。話はできる。

心も落ち着いてきた。うむ、良好。

「・・・話をはじめてくれ。どういう事なんだ？」

「うん、話すよ・・・。」

シャルル兄は神妙な面持ちで語り始めた。

「まず、僕ら二人の出生・・・。」

僕たちは現デュノア社社長の父と研究者の母の間に生まれた。

僕はシャルル、「ボクはシャルロット」・・・そう、名づけられた。

生まれてから物心つくまでは父も母も仲が良くて、皆で暮らしてた。でもある時二人の間に<sup>いさか</sup>争いが起きて、離婚する事になった。

その時に父は僕を、母はシャルロットを引き取り、僕らは引き離された。

・・・ここまででは良い？」

「・・・ああ、続けてくれ・・・。」

「うん……。」

優しくも厳しい良き父だったあの人は、離婚を境に変わった。部下に冷徹、常に自分の周りの会社を見下し、悪いことに手を染めるよう

になった……。僕にも……。とても冷たかった……。」

「……。」

「そんな父も、僕が初めてISを動かした時に僕を褒めてくれた。その時……凄く嬉しくて……。また褒めて欲しくて頑張ったな……。」

「……。」

「最近まで実験や操縦試験、特訓を必死にやってきたんだ。

そんな矢先シャルロットが帰ってきた……。」

「……ここからはシャルロットが。」

「うん。」

今度はシャルル弟改めシャルロットが話し始める。

「ボクは兄さんから引き離された後、母さんと田舎で二人で暮らしてた。

母さん、仕事しながら家を頑張って支えてた。文句ひとついわないで。

母さんは離婚した後もどこか父さんを心配している感じでいつも口に出ってたんだよね……。」

「……母さん……。」

「……そんな中さ、母さん病気で倒れちゃった。

急性のガンだったらしくて手遅れで。母さんはボクに見守られながら逝った。

爺ちゃんも婆ちゃん既に亡くなっていて。身寄りの無いボクは途方に暮れてた。

その日暮らしてろくな物を食べてなくてさ、いつもお腹すいてたっ

け。」

そうか・・・それで食堂であんな事を言ってたのか。

「そして偶然昔世話係だった人に再会できてやつと家に戻れたんだ。  
・・・母さんの事を報告して、その後ボクは検査の結果高いIS適  
正がある

事が分かって。それでボクも兄さんもここに来た。」

「そうだったね、そして今回の任務・・・。」

「・・・お前が嫌だつて思ったことか。」

「うん・・・それはね、この学園にある専用機たちのデータを会社  
に転送

して、IS奪取の手はずを整えること。」

「・・・。」

「シャルロットが男を装って来たのは他の二人のISを操縦できる  
男と接触

しやすくするためだったんだ。」

「・・・なるほどな、相部屋になり仲良くなれば何か聞き出せるか  
もだし。」

「・・・シャルルは流石に男・・・だよな？」

「それはもちろん。と言うか着替えみてたでしょ？」

「あ、そうだった。」

「ん、で話を戻すと僕は授業などでとつたデータを送ったんだ。」

「・・・。」

「・・・ただ送る時に任務と割り切っていて、も凄く嫌に思ったんだ。  
皆とは一緒に授業したりご飯食べたりして仲良くなってたから、  
今まで感じたことなかった罪悪感が襲ってきて・・・。」

「・・・。」

「だから廊下で君にどうしたら良いのか聞いたんだ。」

「・・・君の話を聞いて僕決めたんだよ。正直に話そうって・・・。」

やっぱり僕はこんな嫌だ……。」

そうか……。自分で決めたんだな……。なら良い。

「なるほどシャルルは分かった。

……。シャルロット、お前はどっと思ってるんだ？」

「ボク？……。ボクは最初から学園に来ることすらイヤだったよ。あんまり大勢の人と触れ合うの慣れてないし。

演技とか良く分らないし……。

ただ、皆と一緒にいるのは楽しい！ボクここにいたいなって思っただ！……。ただ。」

「？」

「……。ただ？」

「……。ボクは……。女の子として皆とお話したい……。自分を偽って話すなんてボク……。イヤだよ……。」

「シャルロット……。」

……。ホント似てるな、お前ら……。

「……。なるほどな、ならお前ら二人とも嫌なんだな？」

「「嫌だ！」」

「よおし、なら簡単な話その親父の命令なんか知らん！つて一回切り捨てちまえ。」

「え？」「どういうこと？」

「任務なんか放棄してここにずっといろってことだよ。」

二人は俺の予想以上に驚いている。

まあ、今までのこいつらの経緯を考えれば当然か。

「でもそんな事しても……。」

「きつと父さんはボクたちを連れ戻しに……。」

「安心しろ。IS学園の特記事項のおかげでお前らは保護されてるからここにいる間は連れ戻される心配は無い。」

「え。」

「それに、もし無理やりここに来ようものなら俺ら学園一同でお前らを護つてやれば良い。こここの連中は先生含め良い奴らだ。お前らも分かるだろ？」

「……どうして？」

「ん？」

「……どうして僕たちをそんなに庇ってくれるの？」

「仲良くなったって言ったってボクたち会ってそんなにたつてもいないのに。」

「……ほっとけねえからだよ。」

お前らの気持ち分かる……俺両親亡くしてるから。」

「！? そんな……。」

「……まあ、俺は大層なこと言えねえけどさ。」

ちよつと聞いて良いか？」

「……うん。」

「……我慢すんなよ。お前ら心のどこかで泣きたいって思ってないか？」

「!」

「二人とも母さん死んだって時泣いたか？」

親父が冷たくなってどうして!??って泣き叫ばなかったろ。」

「……昔の俺となんか似てるんだよ。」

「え？」

「昔の俺はどうして俺だけ親がないのか分からなくてさ。聞いても分からないとしか言われない……。」

だから俺は我慢した。どうして??って気持ちを。」

そして物心ついた時に親戚に死んだって聞かされた……。最初は分からなかったけど。意味を覚えてもらった時。」

「・・・泣いた。死ぬほど泣いた。」

「「「「「「」」」」」」」

「でもその後心が少し強くなった気がした。凄くすつきりした。・・・お前らも我慢してるんだと思う。」

「・・・きつと自覚ないと思うけどな。」

「そう・・・なのかな・・・。「「「「「」」」」」」」

「・・・シャルルは遠慮してかなり我慢してるだろ。」

ホントは飯だつてシャルロットみたいに沢山食べたいんじゃないのか？」

「「「「「」」」」」」

「・・・シャルロットも男でいることが凄く嫌なんだろ？ホントは女の子らしくしたいけど我慢してたんだろ？」

「「「「「」」」」」」

「・・・泣け・・・。」

そう。

「泣け・・・。」

お前らはさ・・・。

「泣くんだ・・・ほら！・・・。」

泣いて良いんだよー！！

「「「「「う・・・う・・・」」」」」」

「「「「「うわあああああああああああああああ！・・・」」」」」」

「・・・そう・・・それで良い・・・。」

泣いて吹っ切っちまえ・・・。

「……ぐすつ。」

「どうだ？ すつきりしたる？」

「……うん。」

「よし、お前らは今一歩前進した。」

今の心境どうよ？」

「……うん……吹っ切れた……。」

僕父さんの嫌な命令聞かないよ……。」

「ボクも……男の振りやめる……。」

「よし……良く自分で決めたな。偉いぜお前ら。」

「……ありがとう……褒められたの久しぶり

だよ……。」

「たはは……ほら（がばっ）」

「!?!?」

「・・・どうだ?こうされるのも久しぶりだろ?(なでなで)」

「・・・うん・・・。」

「・・・あつたかい・・・//」

「・・・(スツ)」

「あ・・・。」

「・・・どうした?」

「・・・そのまま・・・。」

「・・・はいよ・・・(なでなで)」

「・・・まったく・・・仕方ないやつらだ。」

「えー、ではお前たちの新しい仲間を紹介する。」

次の日のこと、シャルロットは決めたとおり女子としてこのクラスに編入し直した。

「シャルロット・デュノアです!皆さん、改めてよろしくお願ひしまーす!」

「「「「え、ええええええ!!!」」」」

当然の反応だな。俺とシャルルと織斑先生以外は仰天だった。ホント愉快だこのクラス・・・。

「そんな訳で、奏。お前は一人部屋ができたのでそちらに移動すること。」

「はい、了解です。」

「せ、先生!私とイサカの同室は!?!?」

「・・・何を言っておる。無効に決まっているだろう。」  
「そ、そんなあく！一時的だと聞いたから明け渡しましたのに！..」  
「ふむ、もしどうしても奏と同室が良いなら私に組み手で勝て。」  
「・・・ムリですわ・・・。」  
「・・・なら座れ。」  
「はい・・・。」

あえなくセシリア撃沈。  
箒も同じく撃沈。

ま、仕方ないわな。これは。

「ではホームルームを終わる。」

そして織斑先生は颯爽さつそうと帰っていった。ヒュー！  
ん？シャルロットがこっちに？

「昨日はありがとねイサカ（コソッ）」

「ん、気にするな。」

「・・・これ・・・お礼！（ちゅっ）」

・・・へ・・・。

「ああああああ！！！！」

俺・・・キスされた？

「えへへ、さてボク授業の用意してこないと」  
「・・・ああ・・・いつてらっしゃい・・・。」  
「ふふ、良かったねプレゼント。」  
「あ、シャルル。」

「僕もありがとう。君のおかげだよ。心から笑えるのは。」

「・・・良かったな。これからもよろしく頼むぜ。」

「うん」

うむ、良かった良かった。

「イ〜サクカ〜????」

ん？何だこの悪寒は。

「今のはどういふことですか?!?!」「ドガン!?!」

「ぐわらば!?!?!」

・・・部分展開で殴るなよ・・・死ぬだろ?・・・。

「うわ、イサカー!しっかりして!傷は浅いよ!?!」

・・・今日も・・・平和だ・・・。ガクツ・・・。

第七曲 デュノアの秘密の章（後書き）

というわけでお疲れ様でした！

第七曲完！

うまく語りきれたか分かりませんが、少しでも

伝わっていれば幸いです。

次回こそラウラかと。

では感想、応援、ご指摘などオマチシテマース（＾o＾）ノ

第八曲 来訪、シュヴァルツェア・ハーゼの章（前書き）

第八曲開幕！

注：今回、オリジナルキャラが出てきます。

もちろんオリジナル展開でもあります。

では・・・はじめます！

## 第八曲 来訪、シユヴァルツェア・ハーゼの章

自分が生まれた意味ってものを問われる時。

人ならきつと色々考え込んでしまふと思う。例外はあるだろうが。俺の場合は……ノーコメントってことで……。そして今回話す奴は答えを即答するだろうな。

青年演奏中……

今日も今日とて朝の演奏練習。

何があつても朝は絶対演奏をしている。

強いて変わったことと言えば聞く奴が増えたこと……。

「イサカって楽器できるんだ」

「へえ、クラリネットか……僕でも吹けるかな？イサカ。」

「ん、楽器は練習しながらコツ掴めばできるもんだぜ？  
今時間ねえけど今度教えてやるよ。」

「あ、シャルルだけズルい！ボクにも教えてよ！」

「……一つ質問して……よろしいかしら。」

「何？」

「……何故あなた達がここにいらっしやるの？」

「イサカと話したかったからだよ。」

「……。」  
「チラッ」

……そうやって露骨に見てくる……いやらしい。

と言っか俺に視線向けられても困る。

「……………」 「ちよいちよい

「……………何だ？」

「イサカ、演奏を聞くのは私だけでもよろしいでしょう？」

何でこの二人にもこの事を話したのか聞きたいですわ。」

「……………いや、別に良いだろ。お前だけに聞かすって言ってね

えし。それにもっと色んな人に聞いてもらった方が良いからな。」

「それは……………そうですね。」

「……………何だよ、自分だけ特別が良いのか？」

「！ ち、違います！ っといいますか色んな人とおっしやるならば織斑さんでも篤さんでも鈴さんでも誘えば良いではありませんの？」

ああ、それは確かだ。でもな、セシリアよ。

「それは絶対あいつらにとって邪魔なので遠慮しておこう。」

「あ、そうですね。私としたことが失念してました。」 ションボリ

「……………。(ポンツ)

「！ な、何を？ / / /」

「ま、そんな気を落とすなよ、な？ (なでなで)

「は、はあ…………… / / /」

昔からセシリアは撫でるところという風に落ち着く。

やっば変わらん……………。

「……………。(スツ)」「」

ん？……………何故お前らも隣に……………。

……………はいはい分かった。(なでなで)

「えへへ……。」「……………/ / / /」

朝からこの調子だ、賑やかになったな。

教室に着くと皆いた。

一夏、箒、鈴。三人とも席で先生を待っていた。

「よう。」

「よう、勇歌。実は千冬姉が言ってた限りじゃ何か重大な感じの話があるらしい。」

「……ほう、重要な……か。」

あの人の言うことだ。何かあるな……。  
おっと先生来た。

「では、朝のホームルームをはじめます。」

「……………はい!」「……………」

「うんうん、皆さん元気いっばいです。」

今日は織斑先生からお話があるそうです。」

「全員良く聞け。先日ドイツ政府からIS学園へ連絡がきた。」

内容は自国の部隊に研修を受けさせて欲しいと言つものだった。よって今日からドイツ軍IS部隊、シュヴァルツェア・ハーゼ隊員がこの学園にしばらく滞在することになる。

うまく付き合っていくように。」

ざわ……ざわ……。

軍だと?そんな奴らがわざわざ?……いや、ここは

普通の学園ではない。?IS?学園なものな。

「では、その隊員たちを紹介する。お前たち、入って来い。」  
「……はい、教官。」

は？教官？織斑先生が？

……入ってきたのは女性だけだ。分かってはいたけど。  
4人が……。その中の一人を除くと全員女の子のようだ。  
共通点を挙げると全員左目に眼帯をつけている。

「自己紹介をしる。エンマ、お前からだ。」

「はい！自分はエンマ・フランツィスカであります！  
未熟者ですがよろしくであります！」

初めて出てきたのは緑髪を左にサイドテールしている白人の女の子だ。

背丈は鈴と並べても大差ない感じだな。

見た目はさておきどこか軍人くさい雰囲気を持っている。

「次、カルテ。」

「はい！ワタシ、カルテ・フランツィスカだよ！  
みんなよろしくね。」

「返事は伸ばすなと教官に言われたこともう忘れてる  
でありますか！」（ばしん！

「あう！ごめんなさい！お姉さま！」

「……はあ、変わらんなお前たちは。」

……次に出てきたのは、エンマって奴の妹らしい。  
姉と同じ緑髪だがサイドテールを反対の位置にしている。  
身長が姉より明らかに高い、髯より少しだが高いくらいだ。

「では次、クラリツサ。」

「はい。私はクラリツサ・ハルフオーフ大尉です。  
この日を待ち望んでおりました。よろしくお願いいたします。

次は唯一の20代くらいの女性・・・階級は大尉か。

青系の髪。セミロングな髪型の白人。

待ち望んでいたか、確かに嬉しそうだが・・・。

「最後に、ラウラ。」

「はい、教官。・・・ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「・・・あの・・・以上ですか？」

「以上だ。」

ガクッ！

・・・一夏以来だなこれ・・・。

最後は銀髪のロングヘア！。同じく白人。

この中では一番背が低いが同時に一番雰囲気か逸脱している。

何か冷たいって言うか、張り詰めている？

「・・・今後はこの隊員たちが授業に参加することになる。

仲良くな。私からは以上だ。」

「えー、これでホームルームを終わります。」

・・・さて、どうしたものか。

お、セシリア。

「イサカ・・・あの方々どう思います？」

「え？いや・・・そう聞かれてもな。」

「私はどうも苦手な感じがしますわ。特にあの銀髪の方。」

「ああ、ラウラだったか？確かにお前の苦手なタイプかもな。」

セシリアは根から固そうなのが苦手だもんな。

「なあさつき千冬姉が教官って言われてたよな？　どういうことだ？」

「ああ・・・織斑先生だしな、マジで教官やったのかもよ？」

「確かに・・・あの人ならできそうだな。」

「私も鈴に同意だ。一夏が知らないだけでドイツにいたことがあったのでは？」

「ドイツ軍IS部隊については僕も聞いたことがあるよ。」

「元々ならず者の集まりと聞いたけどそんな感じがしないな。」

「シユヴァルツェア・ハーゼ・・・黒うさぎ？」

「ああ、黒うさぎだよ。」

気がついたら人が集まっていた。賑やかですこと。

しかしホント織斑先生凄い人だな。

もしホントにならず者の集まりだったとしたらそれを統制したわけだしな。

・・・噂をすれば何とやらラウラ・ボーデヴィツヒがこっちに來たな。

「貴様が・・・織斑一夏か？」

「ん？　そうだけど？」

「・・・・・・・・。。。」

「？」

「・・・教官の弟だと聞いていたからどれだけのものかと思ってみれば・・・幻滅だな。」

「なんだって？」

「はつきり言おう、貴様は弱い。」

「！！　どういうことよ（だ）！！」（ガタッ）

「そのままの意味だ。私にはどうしてこんな男が教官にあんなにも

想ってもらえるのか・・・理解できんな。」

「・・・何故俺を弱いつて判断できるんだよ？」

「目を見れば分かる、貴様は守られながら生きてきただろう。今の今までずつとな。」

「！」

「・・・凶星か。」

「・・・お前が思っているほど一夏は弱くない！」

「そうですね！この私と引き分けていますもの、弱いはずがございませんわ！」

「大方貴様がなめて掛かったか機体の性能のお陰ではないか？」

「！・・・私は！何を騒いでいる。」・・・先生。」

「教官、何故です？何故こんな男のために！」

「・・・随分と偉そうな口をきくようになったな、小娘。」

「・・・。」

「授業がある、お前たちも早く準備をしろ。」

「」「」「は、はい。」「」「」

「・・・何だこの気持ちは・・・すつごくモヤモヤする。」

授業の最中も一夏、篝、鈴の空気は悪かった。

一夏は上の空だし、篝と鈴は常に苛立っている。

・・・何とかならんもんかな。

「どうかしたでありますか？」

「ん？・・・エンマ・・・だったか？」

「はい、そうであります。皆さんの空気が淀んで見えまして、気になったであります。」

ふむ・・・少し話してみるか・・・。

「・・・ふむ、隊長殿はそうおっしゃっていたでありますか。」

「ん？ラウラが隊長なのか？てつきり俺はクラリツサさんかと。」

「クラリツサは副隊長であります。隊長の補佐が主であります。」

「ああ、そうだったのか。」

「まあ確かにあなたが間違っただけではないけどね。」

「うお、何だびっくりした。カルテだっけ？」

「うん、そうだよ。」

「・・・で、あなたが間違っただけなの？」

「元はクラリツサが隊長だったからね。」

「へえ、じゃあ何故いまはラウラなんだ？」

「教官が来てからラウラは一気に成長して隊長になったんだもん。」

「・・・なるほど・・・少しだが見えてきた。」

「昔のラウラはね、馬鹿者！隊長殿から軽々しく過去のことを人に言うなど言われていたではありませんようが！」パンッ

「あつー！ごめんなさい！」

「・・・とりあえず事情が把握できただけ良しとするか。」

空気をうまく変えれんまま授業は全部終了。

「夏があのままってのはかなり調子が狂うな。  
何とかせねばな．．．ん？あれは．．．。」

「．．．うーん。」

「どうしました？クラリツサさん。」

「！良いところに来て下さいました。」

実は教えて欲しい場所が。」

「？どこですか？」

「と、図書室なのですが。」

「．．．図書室か、良ければ案内します？」

「あ、お願いします。」

青年淑女移動中．．．。

ガチャツ「．．．ここです。」

「おお、ここがですか。」

「ところで何か読むんですか？」

「ええ．．．んーと、ああ！ありました。」

「．．．それは．．．。」

「漫画です！大好きなんですよ！日本の漫画が！アニメが！」

「へーそれはそれは．．．。」

「やっぱり本物は違いますね！ふむ．．．ふむ．．．。」

「．．．かなり意外だ．．．。まさか漫画アニメ好きとは。

俗っぽい趣味持つてるんだな．．．フランチイスカ姉妹と言い。

軍つてのを俺らは誤解してるのかもしれない。

この人だけの可能性も大いにあるが．．．。

「．．．今のうちに聞いておくか。」

「ちょっと聞いて良いですか？」

「あ、ええ、私で答えられる範囲のことでしたら。」

「……どういう経緯でラウラが隊長になったかを。」

「……誰からそれを？」

「隊長副隊長つて事はエンマから。貴女が元隊長つてのはカルテからです。」

「……わかりました、お答えしましょう。」

「……隊長は元はドイツ軍でも抜きん出た強さでした。」

「それこそ並ぶものがないくらいに……。」

「ISが来る前は……ですが。」

「……。」

「ISが来てから隊長はISの実験を行う事になりました。」

「しかし、適合しなかったのか。実験は失敗したんです。」

「……その結果彼女は……左目が変色してしまいました。」

「それで……眼帯か。」

「失敗により、トップから外され……隊長はどん底にいたのです……。そこに、教官が来られました。」

「ほう……。」

「それからは実力をどんどん上げ、私を超えトップに上り詰めたのです。……今でも覚えています。隊長はその時初めて笑顔をいっぱい浮かべていらっしやいました。」

「……なるほど。」

「その後私は隊長の補佐をするため副隊長に就任。同じく教官から教えを受けていました。」

「しかし1年ほどで教官は日本へ帰国されました。」

「……織斑先生はその時一夏について何か？」

「よく話されていましたよ。自分のただ一人の大事な弟と。」

それでああ繋がるわけか、ある程度納得がいった。  
・・・でもまだ何かひっかるな・・・。

「ありがとうございます、凄く助かりました。」

「そ、そうですか？まあ、話した事は隊長には内密に。」

「ん？ああ、わかりました。安心してください。」

「じゃあ、俺はこれで・・・。」

「はい、案内・・・ありがとうございます。」

「どういたしまして、いつでも頼ってください。」

「ええ、わかりました。」

今思えば放課後か・・・皆どうしたかな？

ピルルルッ！ピルルルッ！

？ 親友（笑）か・・・。

ピッ「どうした？」

「いやさ、ドイツから軍人来なかった？」

「ああ、来たが？」

「何か変わったことは？」

「・・・一夏とラウラってやつがちよつとな。」

「うゝむ、やはりそこだよな、連絡は来てたけど。」

「織斑先生から？」

「そそ、正直ああなるとは思わなくて困ったと言ってた。」

「なあ、お前はラウラについてどれだけ知ってるんだ？」

お前結構情報通だし何か知ってないか？」

「・・・知りたいか？」

「？ ああ、知りたい・・・。」

「だよな・・・うんやっぱ話すわ必要そうだし。」

どうしてラウラが。周りの感情を理解できないのかをな。

・・・ラウラは試験管ベビーだ・・・親がない・・・。」

「!?!?」

「・・・育てたのも軍の人間・・・あいつはただ戦うために作られたんだ。」

「・・・。」

「・・・お前と似て非なる状況なわけだ。

あいつは・・・愛を知らない、理解できないんだよ。

愛を受けたことが無いんだからな。」

「・・・そうだったのか。トップになって笑顔だったのも。」

「千冬さんに初めて愛あるお褒めの言葉を貰ったんじゃないのか？」

本人は理解できてなくてもきつと何かを感じたんだな。」

「・・・自分が一夏に嫉妬してるって。」

「理解できてないだろうな。」

「・・・。」

「だからあいつもきつと困惑してるんだと思うぜ。」

自分の知らない感情に。」

「試験管ベビーってこと織斑先生は？」

「知らないだろうな、ただ教官として指導にいったただけだし。」

「・・・。」

「とにかく、そこまで理解できたなら話は早い。」

ラウラのことはお前も何とか動いてみてくれ。」

「ああ、ここまで知ったらほっとけない。」

「そう言ってくれると思っただぜ！よろしくな。」

ピッ・・・パタン

・・・つっても一夏たちもラウラも何処にいんのか・・・。」

「「イサカ!」「」

「! どうしたお前ら血相変えて、何があつた!？」

「鈴さんがラウラ・ボーデヴィツヒに!」

「! どこだ!？」

「演習場! 早く来て!」

嫌な予感がする・・・くっ。

第八曲 来訪、シュヴァルツェア・ハーゼの章（後書き）

第八曲完！

・・・なんか重苦しくなっちゃった？

くそ！シリアス！唯一のシリアルはクラリッサと言っても良い！

次は一夏の方も何やってたのかも交えてこの先を作ります！

こうご期待！？

感想、応援、ご指摘などオマチシテマス＼（＾o＾）ノ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8200r/>

---

IS インフィニットストラトス ~静かなる奏~

2011年3月29日10時07分発行